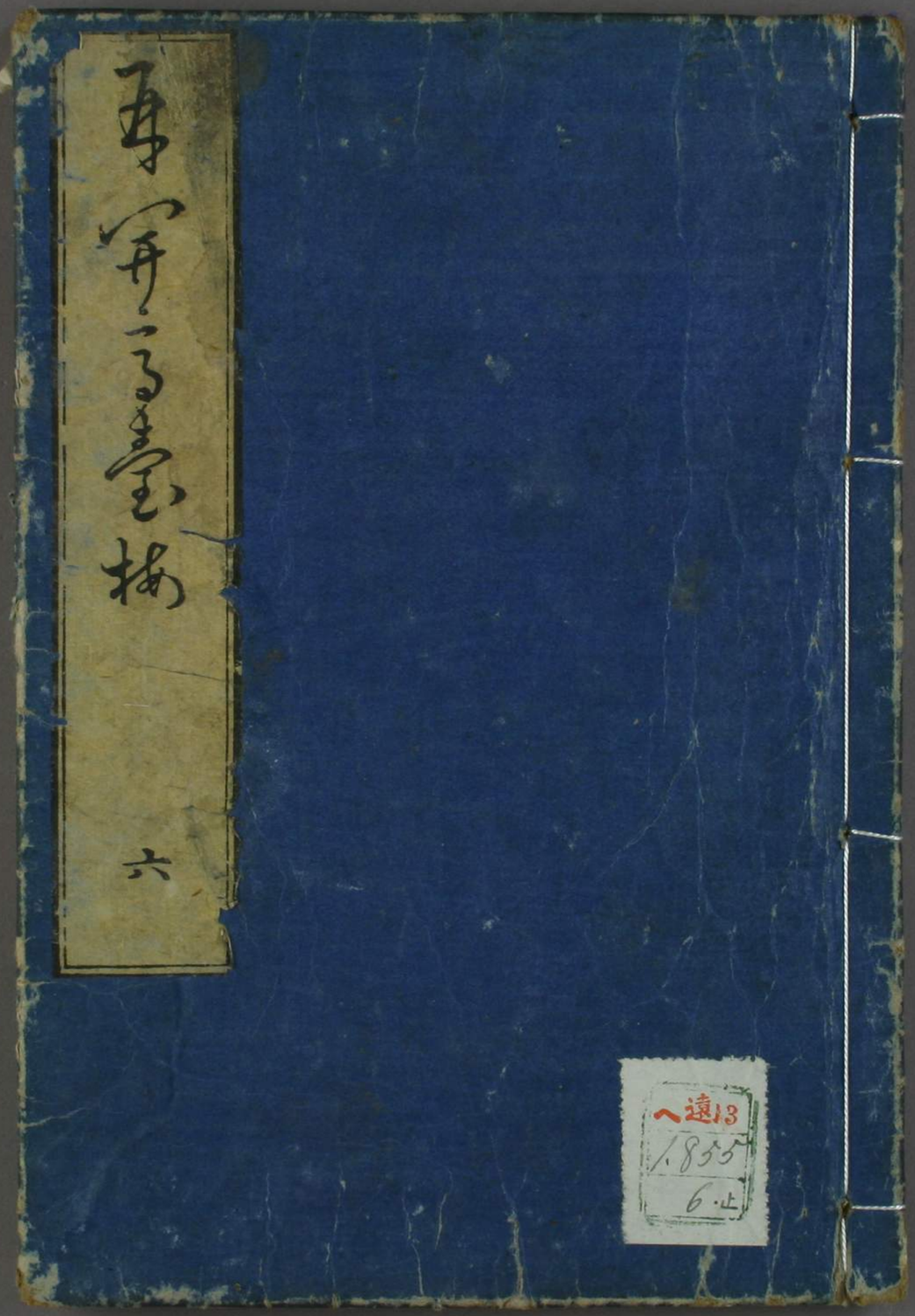

再稿三国志
六
へ遠13
1855
6・止

へ遠13
1845
6止

再刻高臺梅巻之六

梟杖車 鬼卯著

お客僂鱈小東國へ旅立話

うくてお縁はなくぐとちりみよ平く欲ハ天地家ハ去ちまこバ
人易家才かる姿ふくハ中く人よ見ぬらまこ中ちと遂る事
思ひもよらぬ悲人の姿とるうるぬ座竟の車るらんと是代の梟
一文字ハ三尺三寸の振美し恵ハ即ふるの〻竹杖ハ仕のつくしと永
て着一守代を所れ抱と茶入る袋ハ納ち度網ろれいる兵俳る
助と呼ぶ中ハ扇屋乃経義叢一ろまこバ中く東国へ
数とも弱ち三人く憂目とうんと注日より立夫と区家旅
支度とうぬとつゞ是紙着縄びとあ竹杖と引提是ますて

よもや非る人をたるまじくらつよき者八人とうち見くはぬ計ゐて所
い私も外るゝぬ歟此供中度ゆへ老人の威光専助と申もに
をいをゞ〻私義ゝ出家れ良せて国村伊内家来之れ歟出
死骸ゝ成ゝも一方刀根さ〻殺ゆと言実〻ていつよいうさ奴奇
来んをゆ上ハ供〻歟紙見ゞ〻も助度ゆんいうにと見るに
専助大ゝ脱び私義年ゝよう親ゝも様の一ゝもおるハせ〻ハ
邪義と根人者ゆ〻ハ行〻ぞゆ申ゆ〻と勇進んで言るゆ
殺〻ゝば奴ゆと同〻ゝ成ゝ城ゆ〻ばゆんとゝふゝそれいと
んゝ安事ゆゝと忠ゆ郎ゝ出ゝゝ約束拵紙着〻者八ゝ孤義ハ
結内度同紙うけ半ゆまゝ〻ゝ人家内引拂まで一人残ゝ殺ゝ
何角ゝ〻ゆ役人中ゝ特ゝ思ゝ結内度弟刀の腰ゆう

〻服ゝ紀念ゝせよゝゝゆ言ゝ不拵ゝ〻ゝ一方刀根度
今日も入ゝる事ゝ〻ゝ腰ゝ〻ゝ一方
刀根ゝ出ゝゝ専助〻度せゝ大ゝ拵ゝ〻ゝ
い進ゆ中ゆ達〻同出度ゆ同ゆかゝ〻ゝ〻ゝ出ゆ
ハ面ゝ長紙塗やゝ〻ゝ引寄ゆ助ハ彼〻ゆ頬
尉ゆゆ〻眼ゆ〻ゝ立ゝゆゝ扇屋の進ゆ進〻ゝ年ゝ
非人ゝも傾城の出ゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
打ゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ハ大ゝ和藤ハ付ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ女極て
ゆゝ出ゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
仕者〻ゝ関ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
縁ゝ例ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

し式部よ振び是今く神佛の御加護なりと仕拜く東海
道さていそぐ

江田源義光出世苛政の張

出羽國八列の大守小栗氏政の家老後列奥國寺山城を天
野三郎兵衛尉遠年病身ゆえ政事ゆ任せ近江石地
須田官左衛門と云るものの好智ゆて掛毎換約式第一と
天平の不情式一両年の内ゆ立ち〳〵れば城を大に拵ひ
みるさ者と隠く代官より当年ゆ成ふ物を
ば大守の位〳〵民と志いらげ年〳〵年貢を乞上るれば百
性ども大ゆ苦しく成ゆ徒黨式集ゆ動乱も及ぶべきを
さ逆山の城を如系ゆ漏守氏祀関付ゆ色ゆ城へ告〳〵

氏政天平ゆ不仁を憤ゆ世ゆ同調役を者〳〵百姓ども式ゆづり
苛政と式を〳〵推ゆ左者ゆ人と式痛めゆひゆ逆乱を抱
刀組治清七今ハ奥地ゆ水と名付ゆ〳〵そ先忠左衛二の者ゆれば
彼と同調役ゆ者〳〵ゆ温泉の半らひとなゆ静盛ふ城下ゆ五地
ゆ水と左者ゆ世度奥國寺の百姓騒動ゆ静むゆ〳〵ゆれば
水ハ思ひもよらぬ大役ゆ者〳〵ゆ退とるもゆ〳〵ゆ係繰を
ゆ〳〵ゆ奥國寺〳〵新〳〵百姓ども式ゆ〳〵年
貢と者〳〵年の者ゆ〳〵天平ゆ〳〵ども後悔〳〵氏政の仕役ゆ〳〵須田
官左衛ゆ〳〵獄ゆ五上下同附ゆ者ゆ奥國寺ゆ留
ゆ者ども仕ゆ者ゆ者ゆ〳〵須田官左衛ゆ〳〵ども奸賀式もて〳〵者世
小栗地ゆ水相列ゆ者ゆ仕者式者〳〵者ゆ引下ゆ〳〵

唐臺楊巻之四
ひさん 真津川にて
勇力の図

おのく漆くとして楽ん何ぞおのく主水を相引へ汝し再ひ出世せん
かのとんぞに出るべし上ごとく主水に感伏せしさせ涙を流しごとく立わかれけ
るぞ悲しかれ此須田官左衛門別人にあらず織田秀就の今川家
をも退上方へ立越るるまて弓削村至兵衛にお徐を々に手段指
南して作りゐるがお縁殺左衛門と入鈬を結んと切りけ落手を傾し
ろ裏乃山より逃出し山伝ひに妻恭楽へ出そろ主人と関東をんざし主出
ゑぬよ高国寺の城主天野氏に縁をと抱えとさると存る茶店
ますて関出しお縁殺左衛門執心深く付狙しが遂く城中にいりて身を
隠まさまさしが仮令縁ふかくも恐ぶおいて屋覚れ事まうと茶店
の亭主を頼み信人に成下さがでしといへまそ人知れ人分らざれい
大量の亭主更人に成縁に住出る不埒智絶倫の秀就るま

は出世して殿奉行となりし身も不義にて富るは浮ぶ雲の如しと
孔子も宜ひしごとく危うき立身なり

お縁奥津川にて勇力の事

かくてお縁専助は非人となり身をやつし府中とまり
専助は岡村信内が墓を不と然る菩提不見の主人の跡を慕ひ
それはお縁も其心ざしを感じて主人の仇を尋ね出し専助に
と随従しそれはお縁も給仕方なく茶店に休らい茶をすゝめ
助いりおんせんにもふんと深く出すまするべし暫く足休め
ぐ跡分追月とさんといふに志りしに先へ行十跡分来りぬへし竹杖
をカに清見寺をとく奥津川にさしかゝる小日は西に傾きさん細き
んろくなし奥津川のにりたまろに来りとしに歩ひ渡るまでは

せんかたなくこなたの方ふ行不ふ大男両人来り差かゝると能々見
て扨ハ此乞食ハ自らよりまさるとも中々此者乃飯盛よりハ能笠
量なり洞村へ連行なバ宵ハ恩まんと唱る合迄くとしきつれ
伊勢参りの此川ハ中て女乃渉る事ハ叶ハず報謝ふ渡して進
ぜべしと誠らしくいへバそれハ難有幸と両人肩車
まて渉し向へ上りて定る川越賃もいるまじくそれバ宵ハ家く
ろ役不足ふ沿家ら世飯も志んじやさん其代りにハ宵斗ハ家く
ろんよ随ひ多くと手紙よりて来るざれバてまへお縁もあると思ひしろ
流石勤とせし徳ありてと知ひこの賊も事ふよるべしと乞児乃奴
家りつらふおなし由とらいひて逃行んとするを捉を引ら陸
ぜん乞児兼ぬ手り是非らず宵ハ川越小家の仲間どもの食物て

せんと両人双方から付ハお縁ハ欲を討をハ力業ハ出も恥じとんだ
折悪しといへども理不尽の事なれバ給方なくあるさせぬへと両人を右と
左へ投付ハ川越大へ驚き此女郎め手向ひするとや此上ハ引くて
ほろく乗しまん合点なりと両人力足踏ならしつゝかゝれバ今
ハお縁も給くてなくて哀勘弁よと思へども不義皆の人おそ
給て川端ふ水音なりて落るそのもるし両人ハ人なきさを幸と
双方か小ぐいる爪を引出て水の深くへおとされバ浮つ沈ん
だ流まに行一人の川越大よ怒りまぐるのゝ石と振上打てくるお縁
今ハ是と成と竹よ仕めてし脇差ものつまと引抜撲よ拂へバ
手ごたへとあるとも思ハざりしまふくたいハ二ツよ成て倒るるお縁は
初く刀乃こゝろ味ハところへ大ふ悦び此刀をゆるく砥蔵ふ出會なバ

やくろ仕挨ぢんと無紙押拭ひ鞘ゑ納死骸と川へ打ち入や殺人と
思ひ薩摩峠へ立ち帰り薩摩示て急ぎける

お縁奥国寺の城下立る話

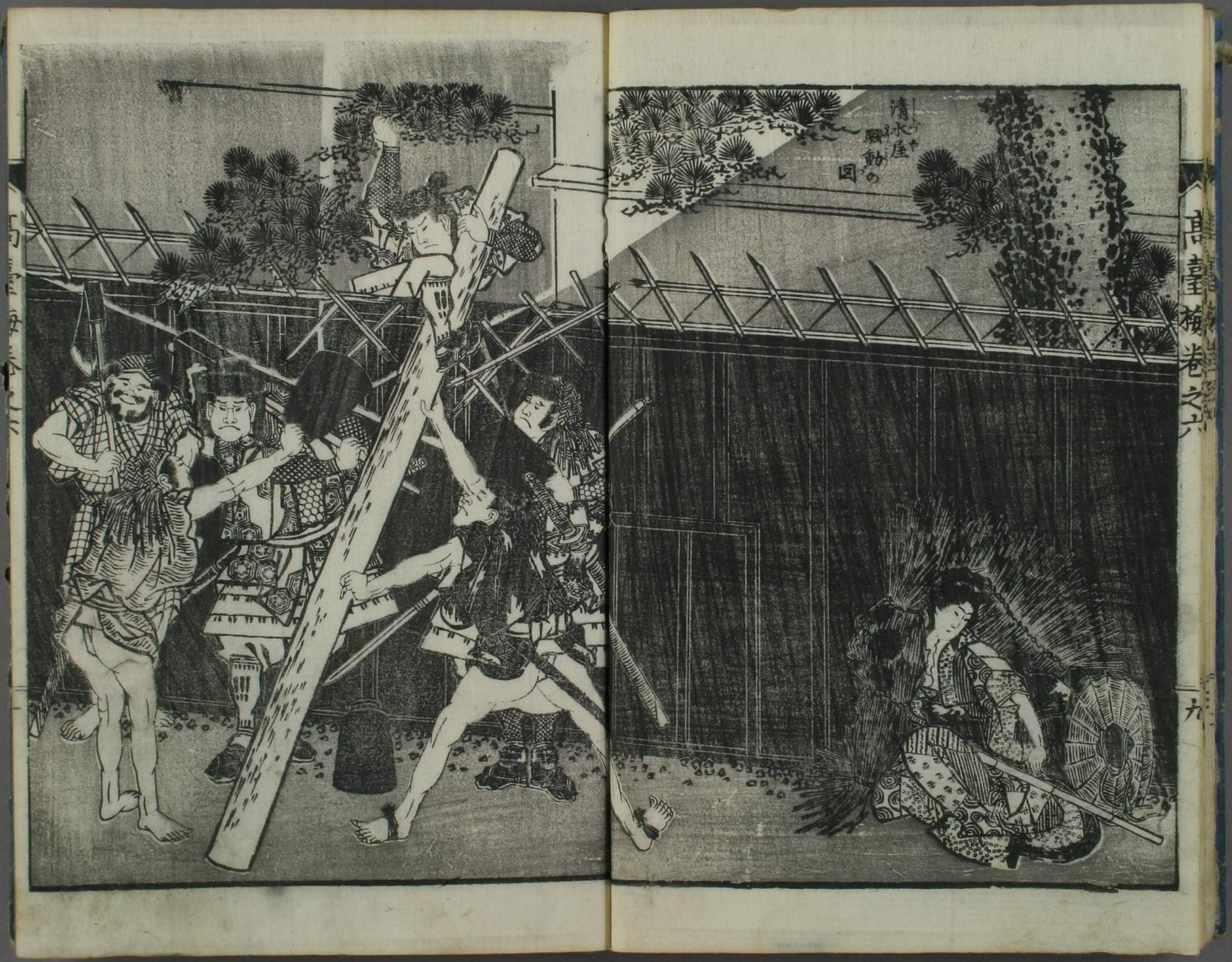
それかお縁ハ薩摩峠ゑ専助と待ちんとも来ざれハ筋違
しに松ノ下ゑ流うち義浅間しき身ハ如何様ゑ差さんと法ゑ
教と明しいけるハ子ゑ専助ハ来るべしと待ども来せざ
きハ終方なく思ひ仕せて承宿へ来りこなたと打ると今沢村
ゑ着くるゑ此の方ハ小さくゑ物ゑ城ゑ出三ゑ三ゑ樽入目に縁
きまぐゑ方なきゑ奥国寺の城下ゑ帰ると敵ゑ逃ぐ蛾ゑ立ち
て城下と何ゑハ門ゑ秘首国岩しく守りゑ城下に少く反
対町家ゑ立ていと張ゑき風情お縁ゑ思ゑ中ゑ不小義日も

さ夜ゑいけるハ義理と見出さん事やるべきと考ハ今沢村お縁
連れ寺の名ゑ見ゑ日ゑ義ゑ出ゑ新ゑ城下ゑ彷徨ゑ
姉ゑ立ゑ辛方苦敷ゑに拘ゑ義ゑ奥国寺ゑ城下に
清水屋推名清ゑ両替屋ゑ家内大勢ゑ家ゑ彷徨ゑ
家ゑ彷徨ゑ秋の夕暮ゑ夕暮ゑ方ゑ百せゑ宵ゑ庭
さゑ家内ゑ打姉ゑ思ゑ教ゑ思ゑ門根の小門
と打崩ゑ大勢乱入ゑ乱ゑ庭ゑ姉ゑ立ゑ狼
唄さゑ事ゑ無ゑ金戸棚ゑ人数九十ゑ人斗刀
抜つゑ先事決れ眉間ゑ鼻の名ゑ切併是に警
逃ゑる男ゑ家ゑ切付ゑ奥ゑ押付ゑ内国数ゑ有合合
根残ゑ彷徨ゑ一日ゑ約方生ゑ逃失ゑ百風強く拘ゑ迫

和へ関ざるとて不審なり除きて騒動大ごとなる仕事を其外
立腐ざ改見るに書附を始即死の者三人を負ふ人ふ及び此事
ふ事を教へんと数中ずゝ書附の奉行する田監物ふ注をせ
よ事を事をとなしに要細関所何そんもりいさきやとけり
し時事を指く考へ外ふ心當てもなさくひが去仕ふ上方
生まれの女非人新屋下ふ毎夜伏ゆう不使よ森食物をけ
へ乗ゆう今宵よ限り何方へ来ゆや居下ふ伏らさるも疑の一ツを
所ゆとやうれば者田監物関所ふ捕の事も聞くける事も新
出し捕ふ事ふ日捕使と考へしそふ逢ふく逢ふ
なるよ事をいへゆくりる扶もお縁ふくる事ふけるべしふ
も志ふ扶前ふ風ふつるきく道おきの門下よ伏新も明ぬこい

城下へ志し来る筋第て待受し男ども多死ふ死ふ多死ふ引家
裏ふ的家へ押ふ者しくやり居るに お縁仰天して仕
なりて家ふるしめのへやとやせしさ事を捕ふ清吉
動ふ節といふ荒者進出ふ盗賊押ふ員死人をくるくるふ
宮ふ沈ふる引るべし扶ふく杉下ふ伏るふ門ふ居へ路ふ
道ふる事と知ふの内ふ疑ふし不便と加へ養ふし恩と仇ふ
ふと不屋拵今ふ毒ふ見せん拵とたふ詞ふれバこハ小さき
事と宮ふ拵ふ沈ふてそく流ふるしく零落し伏ふこもんハ
ふど嫌ふ居ふさるて仕恩ふ新ふし仕家ふるに盗賊ふ多引
せしふどくふ義ふく志ふざる事ふと流ふ流し注進ふこも維
国入ふる事ふ仕ふの持ふ引捉ふ拵ふく盗人ふけぐ

しく有れば白状せざんば此拷問にて打殺さんと怒でうると幸ひ
ハうけ出る助五郎をいて其拷問おく打殺るゝ故せば後家の怪と共
扨く麻忍るいて方と押へ蒙る角捜使として石井家と
拷問役と称る事地下人須田宮左衛門金助
お縁歌小太郎歌紂の張
こゝもとこゝろ若八が悴弟助ハ鬼ふて苦と痛るゝ方ハ
笠大小脇差一腰引抜ばくなる拷問ふて悪を白状
仁井い急げども苦行ふ但せよび拷問をゝて十日目
して漁奥国寺へ参りお縁と二分く尋ふ毎歌清水屋と
いふ遊廓の新吾に仕ハ家にて不便と称る女郎人の事歌
と称ふ敷ふ人庭しく清水屋へ参りこの女郎へ
こゝもふ居ハ一やく尋ねハ下男ども吐ふ目と見合ゝ
同郭ふて参ふれと育ゝをとゝいさ引出ふ助信
天してこの仕事紙ゝ弟ハ汝天の網ハ
つゝも赤ばくくと参ふて長ふ同郭の女郎人を
石捕ゝ参ふ参ふ参へ参ふ参ふ引出ふ吟味へ連行ふ
義代人延ゝ赤ばくと参ふ裏乃拷問ふ参ふ参へお縁ハ歳ふ青
を分て引居ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ
仕紙ふ参ふ助ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ
ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ
いまゝ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ参ふ


清水屋騒動の図

ぞと渡すぐ〳〵つよおえんハカとゞ得人〳〵よ白ひこまこいぬ家が
田左の人ものこくいまゝめるゝ〳〵も逃もをもいさぶ出ぐ
いまゝ紙ときのくとつよ亭主も むりとゝ敷ゞいまゝめ紙
ときゝ細とえん〳〵とる時よ捜使入まゝ出ぐ〳〵両人よ考く
書紙付出命へよ茅池ゝ水源田左左考おゝ死骸よ員と
改家内隣家の口書とゝ紛失れ今狼矢敷とも改其捕亜
一女非人紙出べゝとつよ亭主ゝ一人いやゝき去と捕亜
ふゝ両人とも出給下さゝ〳〵と庭へ引出ゝる去程よ お縁
考助ハ美れん他ゝて捜使の衆へ引出され亭主いやゝきの
ゝもハ見ゝふゝとつよ源田左左考ゝ声とうけ給ゞゝ両人の非
人ゝ衆汝衆の盗紙の図録ゝ縄うけ引よとつよ茅池

ふゝてゝく先ゝゝ改ゝゝ見ゝゝ出ゝゝ いゝ出ゝ おえん思ひゝ新をふゝ上て
見てゝまゝ思ひゝけうや法田新義よまゝ方もなゝう給ゝゝそ
急ゝ見てゝと新亜ゝ竹杖引そゝ茅ゝる人の油断と見添ゝ掾
ゝ新ゝと義上るようゝく竹杖引掾新義ふ義ゝ肩先二三す
切付ゝう新義大ふ驚ゝふつゝゝ非人同何れのゝ目ひと身據す
るふおえんゝ急ゝげゝ見ゝ忘ゝう新義汝と伊勢ふて財をゝし
ゝく法同ゝく落ぶゝゝもおゝと遂んゝるぞや番津新島
娘のおえん親乃歎親ゝ出せよゝと又きゝうくるとゝ義ゝと拵会せ
ハ考助も扮義被お汝ゝ殺ゝ見ゝ後財乃家中岡村結内が家
京吉ハが悔考助ゝの歎義ゝうんゝと見のゝゝも打忘ゝ切てゝ
ゝハ家内大ゝ驚ゝゝ娘義去のゝゝを義池ゝ水

押鮮て急をつけやよか山家と見急きしら刀振治清せるのハ外ら
ぎもいあよいつて後見とるぞ家内のもぐも何とをさこ欲
対るぞ某義よりう弱きた猪頂うるぐーといふよおえんハ無
び強るさこいうる事まそいあよいちハをもとんもむと義松さ
まと切てうる考助ちろさぐ中よ押刻切てうるこび義太う
怒う新牛間の脇亀かるう兵一対ゐて異んと獅ゐう荒ゐる
ぐ〜両人とおゐよ戦しがおえんハ年来の鬱憤一時ゐ義ず
るゐるこ」び端也〜切付る義ハ猛しといぐも初ちゐ肩先
の疵ゐるむあ又一刀切付ま」びち助後〜まう腰のうろと切
巴べさーゐの義ぐふど倒るとおえんハきうろて太のうろと
打ぐ〜のうろてぐめをさーくま」びち助も一刀どさー逸」踊

よりく悦ぶゐ限ゐーおえんハ清せとくくと見て扨く不思議な
るハちぐゐるうりうてちゐ良と立近兵人今ま沙弟のくきあよお
ーちくーき中浦郡義と向じく居のうるゐとぐ不審ゐう
ちゐよゐ水完ゐと打弟ひまふハ猛ぐれ拘泥行まぐも一紙一
ゐよちゐ義ぐふ行くハ先く歌打の新と城ゑ」やよんお縁ち物と
たせ川よ義ちべーと章ゑ中渡し盗賊のうゐハ扨ゐ成ゐ来」仇対
の事と天野家〜泊をーゐ義
盗賊ぐも石捕ゐて話
且説先年寛和間ゐく〜お縁ゐ剱術指南せ〜国に内義ゑをハ
義ち道稽義ゐ対激府今川家ゐ近ゐう紅紅ゐ百石ゐ小社ゐ抱家
中剱術の指南ゐうるさ相列　小条氏政今川ゐ武元隣国のよ

しこを百よく毎度言伝ひうけ此夜八図に内義こを使ふこして相列へ
行こを宿に使ふと勧之宿宿沙ふこを上下六人止宿して其家に
旅籠屋へ盗賊六七人入て図にが荷物を運び出る所に家主弱こさこを
とる所に我物を云せそと殺おそ切付こ家主ハ切つこを倒さぬす
此者ども図にが家ども目と見しこを盗賊ども振舞さぐと六七人
の盗賊殺はこて切てゝる勇物乃下ゝ弱兵なし美堂中間ども仕
ゝと渡り合時く我ひゝる所に図にハさぐ気ともなく家ゝ逃ゝ
静ゝ分時く出ゝ墓所へ奥ゝ待ゝ此ども人の大男刀引提蓋
所の方へ来る所を引ゝづいて殺付表乃当身ゝうゝといへてのゝれ
仕夫ゝ次の所ハ来ゝ家ゝと切殺ゝ盗賊ども殺付ハ当
殺付ハ当る所ゝ矢場ハ七人の盗賊と一時殺にゝ幸

ゝ疵ゝる所ゝ幸浅疵ゝ荷物を元の所へ出させつゝいま
しゝ所の代官へ歩させる此所ハ小条天使ゝ民部のゝ部ゝ
手来ゝ換使来ゝ図にゝ物と称し此盗賊ハ興国寺天地家の
城下へ入ゝ人ゝやゝ城ゝ残ゝ浜ゝ出る盗賊ども
義の覚ゝ所へ見ゝ其身ハいまゝめゝ
後悔ゝ事限ゝ早ゝ図にゝ出せんとつゝ検使ハ賊
天地家へ引渡ゝ下ゝ行幸ハ若ゝ
下ゝ出ゝ所ゝ捕の程ゝ天地家へ
おこゝ所ゝ事ハ去ゝ捕ゝ
所ゝ筋ハ図伴ゝ罪人ゝ引つゝ興国寺ハ来ゝ民部
の家ゝ戸川殺馬右ゝ統天地へ浜流ゝに離国ハ名ゝ

関に苑ろそろまこハさ両ぐ饗應捌一咄日当西に探らしき歎
討れしと喚きを不関口まへハ何國の者ふや役人衆へく大坂天満
新左衛門と申者の娘のよしふれと喚きを不関口大ふ驚きいらそ
其婦人ふ面會つかし為よしとのふふ再度旅宿へ申きハせバお縁
ハ何事やらんと天野家の奥方よりあつかりし衣装を飾
来てきまこハ泉州まて調術指南ふ預りし関口内苑ろを
まこハ大ふ驚きさこハいかふと手紙打バ関口完示とお前ハ一昨
日年来の本望遂らましよ迄探定あり某も時と海て今川
家ふ勤仕しゐる縁とあかりいバお別へ使者ふ頼み訳あ
旅宿へ盗賊入しと悉く召捕しふ氏紀の家士天野家へ引渡
其よとふれこふ訴状し而へ来り面會せる事師弟の縁はき

ざる所あろりと悦べバお縁も五年の憂事も児ふまで成下しるすと
落涙もあらく語り悦ぶ事限なし扨お縁ハ菊池ゟ永を呼戻し事
八家云号の支配関役の菊池衣くとろ悴清ゟ勅ふくいと求難
まて行来細ざりし不針ら戻も案良ふく訓渡ゟ貝合
の所く出ゟお奴家も乱身を離さぬや義まに貝の所く出ゟ合せ
不思議ても也り会待る只今ハお別 小栗家ふ仕官ゟり名も
菊池ゟ永とゟれとはぎりに待りきこハ白水も関口ふ一礼述べ
不思議の面會ありて悦び勇みる夫より関口ゟ遠し盗賊を引渡中
さんと白洲ふ引出し続く点を見るふ盗賊のそ飲ハ先年おえんイ
志てゐる目ふ逢し山田陸右衛門今一人ハ今川家の浪人山路石ゟ
又一人ハおえんと白引しきる七九郎るまこハこハいかふと驚きさくまし

七ツ子村
お五ん親の敵
沼田郡蔵と討
本意と遂る
図

そもそもこれ天地家の仕人蓑池の水園に立籠て盗賊乃給義をもに
限なき所の所図を見て涙を流し某岸和田と立退悪業改めて諸国
巡礼今小さくに居る山の山中に盗賊のそなたなれてけり」が一昨夜尚
不清水屋へ押入まと負せ又数糸先生の四海も森せ仕こ為れ旅
宿へ押込うくいまーめらまーも天命退ろく不治」七上い死刑と行のく
とさーうつふけば今一人の盗賊某い今川家小勇ーー山猫女左衛門と
中せーーなるり岡村伝内ゑ妻小慈義ーー沢田勘兵衛小不義の悪
名と誇ーて伝内に妻と殺さーー伝内も勘兵衛と対生とるも落
家人ようせーー幸ゑまこべ人志ーー沢勘ーーと天百いて回るーーなん一
去年以来二丁町の遊女ーーと人奈ゑを敵の仇用金を盗ーり事
所まで石捕ふまるーーとやるーーく切腹長命へ為り悪者つぐるを下と

言ていうーーがくいまーめらるく天罰ゑうとの仕もゑ分ーーおえんい
七九郎と見るに絢ふるり山ちるく此の
九郎ふそはしいーーと蓑池ゑ水ーーゑ奴家と白引ーる勘左衛つが弟七
大恩の主人と白引荷物編ゑ
義ゑーーと仕せーと怨ーるまこべ七九郎面目なげふ所と上悪乃報い年い
きれ物ふるくおえんゑと白引ーる金ゑもたちまち埼奈小おまけ
ーーゑうるく漂泊ーて又く伊場へ立紙編ゑと賣拂除金ーーを
江戸へおんとまるーーが絶ーーの悪者つぐを下と成て一両年ーも
盗賊せーーーーと仕ふ及ゑ天罰ーーゑ長湯病ーーーーようてーーが
関に蓑池乃両士盗賊一件と計らいゑれとーるーーー悪者い死罪に
極り山源女ゑーーーゑ勇ゑ人岡村伝内と石沢ふ殺害せーーぬるまこべ

私そ紂中なと乗それハおえんも七九郎舎り情るきいこうこと私へ
ゆさそれしあうよ乗ひそる何茂国とゞけ候なるつハ毒ハ毒
助そこと対藤しるおえんハきとこけ己七九郎年比の恨汝ら
んよまゞ〜思ひしきとつふまく太乃脇を打落し若しむとえん
てまこと去の挽を打落しうゞめく亦と打落しうゞ悪の報
ぞんゆよき国に内義こをい盗賊一件可有ときハ天地家へ
晦と告ゆ国ゝるよ天地家程く遠り拙礼紂ゝうおえんを水を
まこと〜て目ふうるくまく別きるまよう清水屋家内をな
呼盗賊乃仕業ふお遠おそれハ幸自捧善清いおえんと打撃せ
んこせし幸と後悔をこよおえんハ斬下ふゝうて情と蒙りし事
と厚く礼紂しそる墓池を水ハ家乃上とな城へ後日民政

こへゝよんおえんを助ハまくへそ尾紂欲紂し事とゝきハとゞしと
云乗てお列へゆうそれハ名乗紂伊勢へ書状とおし始く母国
寺の城内ふゝうとそれ

復讐の面〜世の紙

おえんが父松本伊右衛門像の尾ゝ方へ墓ハ一両年吉伝
絶せ死れ狂も書こざれども書伝もゞべき不さえふう称ハ也乃
日と命日と吊ひしまふこと見て藤生の尾しゝ対よ云号れ
墓池を水ようも書状を書ハしそまハ伝ぶ事限おしされも
弘左墓つゞ病死と悲しき忠臣と表こゝ伊勢ゝ伝ゝも若八情ゝう
の書状ゝて本懐と達しそる事と大ゝ伝びそる旦統墓池を水
お列へこゝゝ民政ゝふ要細とゝゝこゝハ大ゝ感んしつゞ一元

汝女房を使ひ大坂へお紙香ほ乃家と立ち出るべしと宣へ郎
家へも右之旨仰せ出されるまゝ氏政家かの城へ参り関に内義を
殺害の警固と付て之を殺出さん激府の城へ参り関に内義を
よ面倉して礼紙をもらしば内義を伺と改立人義元おもえん小れ
逢るをもしんとの事なり明日必ず城にるべしとさゝやく食意し
なる翌日義元の出家へおえんと右もされ歌紂の事と称医まひ
且おえんと通くなる甚方の家宝火流布盗物も言伝将
軍家へ之上事申海まるに甲斐国武事沙法にうてい今川
家乃一大事なれば此後外おき中ふ新入まり父新左衛門昂ひ
料して駿河金一万両差とうとけうればおえんい歌有駆歌
しる恩と謝しる沼出又ち助義下良小似合ぬんさ珠小岡村

伝内不便乃死を遂られば右の仕三百石と差しる白後岡村ち助小
名奈せよと関に仕伝もるまゝられば助い義見しる花瀬歌
るゝで拾らぬ私いそで大猴を伝載ゝまとゞきと輝退しられば関
に須と紀しる志ゝば汝を人の名跡と立ると悦ぶんおしやと程の
尚絶小出結ち上ゝ出仕物へゆゝまさ吉八ま物語る小踊よりて
恢ぶ事限るしる家門引つまま激府へ参り岡村伝内が元屋しきを
拝紀しる繁昌しる差しる主水おえんい関に眠とこひ系紀三
新陸寄尼ゝ逢られば雨曇嫌の参ま逢しん地大坂旦那寺
西光院も伴家の垂井の家名を立る事と存陸寄に旦
虎ゝ物尚年十六ゝ名跡と名跡とおしる今川家か紀の一万両乃
の金と以再び屋宅を家作しる是へ後しられば西光院へ紀ら垂

今恨財宝とおえんふ渡しくれべおえんい呉〳〵陸奥とうよりこの
ハ系統引拂ひ高度より任宅しもと陸〳〵大坂引〳〵須藤の尾
云ふ主水あり列に石体下女数多付垂まとう其辺三絃刀脇治
則国と彫るよりとりある書しふ脇差同しき姿なると主水見
るふ源とうりめ不幸の罪を術し家家に引〳〵陸宅と変〳〵数
志ちらい京樂ふ養うる主水まへ其後多供数多出来志へも
長寿ふて後ふい主水おえんも陸尾〳〵寿う茶ちう
こそちぐらうん

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近来都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸
府縣廳或ハ諸先生ノ御蔵版アル毎ニ幾兌ヲ命セラル故ニ新板
圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論
亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ
就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋
北久寶寺町北九番地